

## 詩篇99篇

## 《高きにいます神》

- 1 【主】は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。
- 2 【主】はシオンにおいて、大いなる方。主はすべての国々の民の上に高くいます。
- 3 国々の民よ。大いなる、おそれおおい御名をほめたたえよ。主は聖である。

## 《公正なる神》

- 4 王の力は、さばきを愛する。あなたは公正を堅く立てられた。あなたは、ヤコブの中で、さばきと正義を行われた。
- 5 われらの神、【主】をあがめよ。その足台のもとにひれ伏せ。主は聖である。

## 《赦しを与える神》

- 6 モーセとアロンは主の祭司の中に、サムエルは御名を呼ぶ者の中にいた。彼らは【主】を呼び、主は彼らに答えられた。
- 7 主は、雲の柱から、彼らに語られた。彼らは、主のさとしと、彼らに賜ったおきてとを守った。
- 8 われらの神、【主】。あなたは、彼らに答えられた。あなたは、彼らにとって赦しの神であられた。しかし、彼らのしわざに対してはそれに報いる方であった。
- 9 われらの神、【主】をあがめよ。その聖なる山に向かって、ひれ伏せ。われらの神、【主】は聖である。

「王としての神」を讃える詩篇は、本篇を含めて残り2つとなりました。99篇は特に「神の聖」にスポットが当てられています。「主は聖である」という表現が3回出てきますが（3節、5節、9節）、このことばでもって全体が三つに区切られていることが分かるでしょう。その意味で、本篇は「三重の『聖』性賛美（トリスハギオン）」などとも呼ばれます。「聖」（**קדוש**／カードーシュ）とは「取り分けられた状態」を意味し、罪ある人間から隔絶された神の聖さを表します。神の道徳的聖さと完全性、人間の有限性に対する無限性などが含まれた重要な用語です。

## ①高きにいます神（1～3節）

ここでは、諸国の上に君臨される主なる神の偉大さが謳われています。イスラエルは小国、されどその神は偉大なり。如何なる大国も、この方の御前には膝をかがめるほかない。そのことを証拠立てるかのよう、大バビロンの崩壊という出来事がありました。本篇は、バビロン捕囚から帰還した民が神殿を再建したときに書かれたものと考えられています。永遠とも思われる大帝国の支配も、定めの際に崩れ去りました。主なる神はそのことを前々から予告し、ご自身が立てられた新しい支配者によって時代を変え給うたのです。歴史は常にそのように動いており、どんなに隆盛を誇った王国も恒久的に存続することはありません。

「ケルビム」（1節）とは、基本的には契約の箱の上に飾られた翼のある天使を指しますが（詩篇 18:10、80:1 等）、造られたものの中で最も高きにいる天使より更に上におられる神を表す詩的表現です。「シオン」（2節）、「聖なる山」（9節）とは、エルサレム神殿が聳え立つ丘のことですが、そのような低山が世界を統治しておられる神の根拠地であると言われているのです。神は取るに足りないものを選び、そのところにご自身の栄光を現されます。

## ②公正なる神（4～5節）

中間部では、「正しい裁きを行われる神」について述べられています。地上の王は、罪あるゆえに、残念ながら裁くときには常に不完全な存在です。この世ではどれほどの真実が曲げられているでしょう。王の本来の責任は、不正の犠牲になっている弱者を守るところにあります。しかし、現実には拭われざる涙が流され続けています。信仰者の希望は、神の裁きが完全であること、やがてすべての物事の真相が細部に至るまで明らかにされる日が訪れるところにあります。「公正」「さばき」「正義」ということばは、神の「聖性」を表す最も重要な側面と言えるでしょう。

## ③赦しを与える神（6～9節）

ここまででは神の「偉大さ」「正しさについて語られてきましたが、ここでは雰囲気が一変して神の「赦し」について語られます。ここに登場する三人の旧約の人物、「モーセ」「アロン」「サムエル」は、いずれもイスラエルの指導者でありましたが、神の聖さにふれた人々でした。この中で明白に「祭司」と言えるのはアロンだけですが、モーセもサムエルも民をとりなす役割を果たしたという意味で「祭司的な人物」と言えるでしょう。しかし、これらの指導者であっても神の御前には不完全であり、痛ましい失敗を犯しました（民数 20:1-13）。また、預言者たる者も、罪深い民と一つになり、その代表として神に赦しを請いました（出エジプト 32:35、民数 20:12、申命 3:23-27、9:29、Iサム 16:1）。神の憐れみなくしては、歴史に名を連ねる指導者として滅びるべき存在だったのです。しかし、この「とりなし手」は神が民のために立てられたのであり、彼らの祈りがあってこそイスラエルは存続し続けることができました。神が民に赦しを与えるために、とりなす者の存在が如何に重要であるかが分かるでしょう。

私たちには神の子イエスという最大のとりなし手が与えられています。この方は「聖なる神」ご自身であり、神の右の座に着き、再臨の日に万事を裁き、同時にご自分のいのちを代価として信じる者に豊かに赦しを与え給います。本篇の三つのポイントは、まさに来るべきメシアを予表していると言えるでしょう。キリスト者は、自分が信じている救い主の姿をこの詩篇の響きの中に見出すことができるのです。